

世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

バスケットリーに満ちた供物の世界

なかたあやみ
中谷文美 岡山大学教授

インドネシアのバリ島でおこなわれる儀礼には、神々や祖霊に捧げる供物が欠かせない。供物の器や装飾には、身近な植物素材から手作りした編み組み製品が用いられてきたが、時代の流れとともにそのかたちも変わりつつある。

儀礼を彩る供物

ワールドワックのために一九九一年からインドネシアのバリ島の山村で暮らし始めたわたしは、同居していたバリ人家族やその親族、あるいは村内の市場や商店で知り合った人々たちから誘われるままに、ありとあらゆるタイプの儀礼に参加させてもらった。

バリの儀礼に欠かせないもの、それは大小さまざまな供物である。屋敷内外の数十カ所に毎日供える簡単なものから大がかりな祭礼のための大量かつ複雑なセットにいたるまで、供物にはおびただしい種類がある。儀礼の目的ごとに用意すべき供物は異なるが、ヤシの葉を加工した入れ物にバナナなどの果物、花、もち米や米粉で作った菓子、円錐状に成形した白飯などを並べて作るものが基本型となる。

一部の例外を除いて、供物作りは女性の仕事である。祖先を祀った祠や寺院の周年祭、婚礼など

の準備は約一週間にわたっておこなわれる。そのあいだ、関係する女性たちは毎日のように集まり、おしゃべりに花を咲かせながら供物作りに励むことになる。

供物を形作る編み組み

儀礼準備の共同作業は必ず、大量の器作りから始まる。おもな素材となるのはココヤシ (Coconut) の若い薄黄色の葉とサトウヤシ (Arenga pinnata) の濃い緑の葉で、柔らかさの違いや色の濃淡に起因する象徴的な意味に応じて使い分けることになっている。目的別にヤシの葉を切りそろえ、折ったり曲げたりしたものを組んでタケヒゴで留め、円形、三角形、正方形などの形に整える。年配の女性が慣れた手つきで小刀を使い、どんな伐りだしていく素材を、別の女性たちがひたすらタケヒゴでつないでいく。重ねた葉をタケヒゴで留める作業は、実際にやってみるとタケヒゴが

すぐに折れてしまったり、力を入れすぎて葉が破れてしまったりと、意外にむずかしい。ほかにココヤシの葉を複雑な形に切りそろえ、ところどころにユーモラスにも見える模様を刻み込んでから組み合わせていく器などもあった。

女神を象つた細工を用意する。また、バリ暦の一年(二〇日)に一度めぐってくるガランガンという祭日には祖霊が各屋敷地の祭祀場に降臨するとされているが、この日が近づくと、村の女性たちはこぞつて祠や屋敷地の入り口を飾るためのヤシの葉細工作りを精を出す。

移りゆく儀礼準備のかたち

新鮮な葉で作られたこれらの飾りは見た目にも美しいが、何日か経つうちに変色し、干からびていく。儀礼のために用意された精巧な供物群も、神々や祖霊、悪霊に捧げる目的を果たした後は、地面に打ち捨てられてしまう。つまり、儀礼の度ごとに女性たちはまたせせと手を動かし、多種多様の器や飾り細工を作り続けることになるのである。バリの暦に従って儀礼の多い季節が近づくと、市場には束にしたココヤシとサトウヤシの葉が大量に出回る。特にココヤシの葉は島内だ



上：集まって供物作りをする女性たち。かつてココヤシの葉で作られていた細工がパルミラヤシに置き換わっている(インドネシア、バリ州、2016年)
左：スーパーマーケットで売られているガランガン用の供物(インドネシア、バリ州、2012年)



ココヤシの若い葉を細工した器に、花や米、調味料などを入れた供物の例(インドネシア、バリ州、左上：1991年、左下・右：1993年)



ホッチキスで留められた供物用の細工(インドネシア、バリ州、2008年)

けでは需要がまかなえず、隣接するジャワ島から輸入しているという。手のかかる細工については、朽ちやすいココヤシやサトウヤシではなく、乾燥させたパルミラヤシ (Borassus flabellifer) の葉で作ることもある。保存がきくため、儀礼に先立って作り置きもできるし、使いまわしも可能だからだ。わたしが長期調査をしていた一九九〇年代初めに比べると、出合いの儀礼用ヤシ細工や供物用の器を置いている店が今は増えた。供物の一部もしくは全部をまとめて外注するケースも珍しくなくなった。さらに驚いたのは、供物用の器や飾りを作るのにホッチキスが使われるようになったことである。

かつての村の儀礼では、婚礼や葬儀にしろ、祖先祭祀にしろ、より多くの人が集まって一緒にいわいと準備すること自体に価値があると考えられていた。だが時代の流れとともに、お金があれば労力をかけずにすむという効率重視の考え方に置き換わりつつあるようだ。身近な植物素材を加工して供物を作るというやり方にも、いずれ変化が訪れるのだろうか。